たった一つの願い

爽風

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
たった一つの願い

【Ｎコード】
Ｎ５５５８Ｚ

【作者名】
爽風

【あらすじ】
一条蓮（いちじょうれん）は夢も希望も志もない２４歳のＯＬ。
会社帰りにいつものコンビニの角を曲がるとそこは見たこともない世界が広がっていた。
言葉も通じない彼女が召喚されたその理由とは？
異世界召喚ファンタジーです。

プロローグ

大地怒りて、戦乱の危機にさらされしとき、
暁の女神、地上に舞い降り、王の願いを遂げる、
その命をもって。
女神の血が大地に落つる時、わが国光に満ち、悠久の平和を、得る
だろう。
この王、稀代の覇者にして賢帝となる。
王の統べるこの国は長きにわたり平和と栄光の光に包まれるだろう。

サラシュワイル皇国創世記より

「時は満ちました。」

しわがれた声は私が物心ついた時から変わらぬ。
もう何百年も生きたのではないかとさえ思えるこの国の最高預言者。
決して外れぬ預言。

「明日…暁の明星のぼりしとき、この世
ならぬ世界から我が国を救う、王の願いを遂げる娘が現れまする。」

この最高預言者の預言は決して外れたことがない。
そして創世記に記されたこの一説がわが運命を表していると生まれ
た時に預言された。
私は眉を、ひそめる。

女神とやらの命を、犠牲にしなければ国を救えぬなど愚帝でしかない。
この預言にがんじがらめにされているのを感じる。

「王よ。今こそ願いをかなえしとき。
我が国に光あれ！！」

預言者の老婆が天を仰ぐ。
空には月。
明日の朝預言が正しければあらわるのか？
私の願いをかなえるという暁の女神が…。
私は寝不足で脈打つ瞼を伏せて、そっと息を吐いた。

1．足元注意！事件はある日突然に

「あー畜生！あのはげ部長！！」

ゆでダコのような禿げ頭を思い出し空に向かって毒づく。
道行く人がぎょっとして振り返るけれど構うものか！
さすがにＯＬも三年目になると図太くなっていくらしい。

終電ぎりぎりで帰宅の途に着いた今日は金曜の夜。
世間様は花金に浮かれ騒いでいることだろう。
あたしはといえば、血眼になって残業をして終電ぎりぎり金曜の夜になんだってこんなにかさかさしなきゃいけないのかしら。
そんなあたしのささやかな自分へのご褒美。
まあ、それが缶ビールとあたり目、ビックプリンだっていうのが悲しい限りだけれど。

あたしは一条蓮。２４歳。中堅広告代理店のＯＬ。彼氏なし歴３年。
取り立てて夢も希望も志もないけど、責任感が無駄に強いせいで不器用な生き方をしていると思う。
「もっと楽に、肩の力抜きなよ。」といろんな人に言われるけれど
四半世紀付き合ってきた性格だ。
愚直で頑固、くそまじめと評されるこの性格。
どこの昭和のおやじだって感じだけど、こればっかりは亡くなった昭和の両親の性分なのでしょうがない。

ふっと自嘲がこみあげてきて息をはく。
金木犀のかすかな香りが鼻をかすめ、もの悲しさを誘った。
もうすぐ両親が亡くなって5年。
こんな風に感傷的になってしまうのはこんな秋の夜だからだろうか？

あたしは首を振って頬を一つたたく。

「よし！とりあえずかえって酒盛りしよ！」

あたしは気合を入れて民家のブロック塀の角を一歩曲がったその時。

落ちた。

そう。直径二メートルくらいの大きな黒い穴。

工事なのかなんなのかわからないがとにかくあたしは落ちた。

お世辞にもかわいらしいとは言えない悲鳴を上げて。

「うわあああああああ！」

”蓮はおっちょこちょいだから、足元をよく見て歩きなさい。”

苦笑しながらそうたしなめるお母さんの言葉がよぎる。

後の祭り。

今ほどこの言葉がピッタリな場面はないだろう。

あたしは暗い闇にのまれていった。

2．ここはどこ？超絶イケメンの腕の中。

落ちた。
道に開いたブラックホールみたいな穴に。

どうしよう。
このまま地下の下水に溺れて死ぬなんて。
死体目も当てられないじゃん。
っていうかそもそも発見されるのか？
行方不明扱い？
あーそしたら部屋に警察入ったりするのかな？
干したままのベージュの下着見られたら生きていけない！！
ていうか部屋汚すぎ！
朝、遅刻しそうになって洗い物流しに残したままだし、生ごみの処理もまだじゃん！
洗濯物も！！
こんなことになるならちゃんときれいにしとけばよかったわ！

妙にピントのずれたことを考えたのを最後にあたしは意識を手放した。

…
…
苦しい。
息ができない。
スーツがからみつく。

あたしは必死にもがいて水面を目指す。
光の揺らめく水面へと上がっていく。

「ぶはっ！ゴホゴホっ」

ようやく空気に触れると急き込んでしまう。

「¥＃$％&$$＃$＃！」

「＃$＃＃＃$％％ｙ！！」

「は？」

ようやく落ち着いて周りを見るとあたしは思わぬことに目が点になった。
大浴場みたいなプールの周りにはどこのどこのコスプレ好き？と聞きたくなるような衣装を身にまとった人・人・人…。
しかも話している言葉はさっぱりわからない。

不意に一人の男の人が近づいてくる。
漆黒の髪に恐ろしく整った顔立ち。
その眼は深い深い青。
北欧のフィヨルドを思わせる氷の冷たさを宿してあたしをにらむ。

「％&％％％％&，，？」

「え？何？」

英語でもないその言語にあたしは眉根を大げさに寄せてみせる。
言葉がわかりませんのアピールだ。
その人はアイスブルーの目を細めるとあたしに負けず劣らず眉根を寄せて舌打ちを一つ。

感じ悪。
百歩譲って死ぬほどイケメンなのは認めるけど、どこぞの王子さまみたいなコスプレしてぶんむくれてるなんてたいがいな人間に違いない。
まあ、この男は王子様っていうよりも王様とか若き皇帝みたいな雰囲気だけど。

その人は眉間にしわを寄せたままあたしのそばまで来ると背中と膝の下に手を差し入れいきなりあたしを抱き上げた。
いわゆるお姫様抱っこいうやつで。
あたしの今まで２４年の人生の中で自慢じゃないけど男性にこんな扱いをされたことはない。
あたしは一気に顔に血が上るのを感じた。

「な、な、なにするんですか！歩けます！！ちょ、ちょっとあんた！」

直視するのもはばかられるくらいのイケメンに向かってあたしは抗議する。
イケメンだからってこちらが下手に出る必要もないのだけれど、敬語になってしまう。
それくらいこのイケメンには威圧感と圧倒的なオーラがあった。

「＃＄＃＄％％。」

イケメンは声まで素敵らしい。
低いいい声で何かを言われたが何を言っているのかわからない。
だがこの状況から見て「おとなしくしろ。」か「うるさい」だろう。
あたしはおとなしく黙って超絶イケメンの腕の中でこの思考回路の限界を超えた状況を考えていた。

3．現れた具現者

昨日の最高預言者の言葉通り明けの明星輝く頃、それは起こった。
神殿の祈りの泉が光を放ち、一人の人間が現れた。

不思議な着物を身に着けて現れたその人間はまだ幼い少女のようだった。
黒髪に黒い瞳。
肌は大陸の東にいる人種に似てクリーム色だ。
自分の置かれた状況をつかめぬのか目を瞬かせている。

「お前、名は？」

私が問うても眉間に皺を寄せて私をにらむままだ。
言葉が通じぬのか？
まったく厄介な。
俺は舌打ちを一つしてその娘を横抱きにする。

「％＆$％＆！」

その女はわけのわからぬ言葉でどうやら抵抗しているらしい。

「おとなしくしていろ。」

言葉がわからぬはずだが女は聞き分けよく黙ってその容姿に似合わぬ大人びた吐息を漏らした。
濡れた髪からしずくが私の衣服へしみていく。
伏せたまつ毛は長く、まつ毛の先に水滴が涙のようにたまっていた。
言葉もわからずに殺されるであろう哀れな少女から目をそらす。

罪悪感か？
今更だ。
私はこの国の皇帝としての生を受けたその瞬間から人間としての感情を捨てた。
国のため。民のため。
私はその血一滴さえも己のためにはない。
ただこの国の危機を、救い、この国の何万、何十万の命を守るためには手段は選べぬ。
それがたとえ、カビの生えたような伝説だとしても。
なんの罪もないこの少女はそう遠くない未来に殺される。
己の願いをかなえるためにいけにえとなる少女
身勝手なものだ。
何も知らずにこの娘は死んでいくのだ。

「この娘に着替えと食事を用意しろ。大切な客人だ。丁重に扱うように。」

「はい。陛下。」

女官長に娘を託すと俺はその部屋を後にした。

＊

「陛下！ついに伝説の具現者が現れたようですね。これでこの国も安泰でしょう。」

宰相のコリーン・デクターが珍しく興奮気味に言う。
この男は幼少期をともに過ごした数少ない私の心情を吐露できる人

間だ。

「まだ何も始まっておらん。具現者が現れたところで何も問題は解決してはいないだろう。」

私は苦笑して旧友を見る。

「ええ。ですがカイルザーク陛下。これは我が国にとって大きな一歩です。
してその娘とはどのようなものなのです？」

「まだ若い。いや幼いといったほうがよいか。見たこともない衣服を着ていたな。
言葉がわからぬようだった。コリーンお前が導いてやれ。」

「言葉が…。それは哀れな。最低限の会話ができるようにしましょう。」

「ああ。頼んだ。」

「御意。」

「少し休む。」

「陛下。私も含めこの国の多くの人間はあなたにならば地の果てまでもお供すると決めております。
では失礼いたします。」

コリーンが一礼して去っていく。
その目に揺らぎはない。

そうだ。
だから私は進まねばならぬ。
この修羅の道を。
どんな犠牲を払い、氷の皇帝と呼ばれようとも。
守るべきもののために私は心を棄てるのだ。

瞼が重い。
まとまった睡眠を取ったのははたしていつのことだったか。
もう思い出せぬ。
執務室の机に肘を着き、目をつむると、瞼の裏にはきょう来た女の鮮やかな黒い双眸が浮かんでなかなか消えなかった。

4．自分のできること

言葉が通じないというのはそれだけでストレスだ。
あのイケメンはあたしを恐ろしく豪華な部屋に連れてくると、メイドらしき人に引き渡し去って行った。
そのあとあたしは大理石の風呂に入れられ体中をこすられた。
何人ものメイドさんたちに。
彼女たちは何故あのように喜々としていたのか聞きたいものだ。
いったい何の羞恥プレイだと思うけど、いかんせん言葉が通じないのだからしょうがない。
「やめて。」とか「自分でできます」なんて１００回は確実に言ったけど聞き入れてもらえなかった。
そのあとはどう考えても２４の女には似合わないようなレースたっぷりのドレスを着せられて、トリートメントを怠り気味のセミロングの髪を結いあげられる。
悪趣味だとしかいいようがない。
ついにあたしもコスプレの仲間入りだ。

ため息をついたあたしの前に運ばれてきたのは食事。
これぱかりは空腹のあたしには涙が出るほどありがたい。
結局食べ損ねたビールとあたり目、プリンはどこに行ったのだろう？
トレーに乗せられてきたのはパンやスープ、肉料理と薄給のあたしにはお目にかかれそうにない豪華なものばかり。

「＃＃＄＄％＆」

メイドさんが笑顔で何やら言ったので、「どうぞ」と同義だと勝手に解釈してあたしは「いただきます。」と日本式のあいさつをしておいしくいただいた。

どれもいい味付けで、ピラニア並みのがっつき具合でスープの一滴まで堪能しつくした。

「ごちそうさまでした。」

うーん。満足満足。

自分で作らなくても料理が出てくるなんてなんて幸せな生活なんだろう。

ふとノックがしてドアのほうを見ると、細身の男の人が入ってきた。

薄い茶色の髪をオールバックにしてなんていうか「執事」って感じ。

細い目はなんていうか冷酷ささえ感じるけど。

「$%&&（（&&？」

うーん、なんて言ってんのかしら？

その人は少し困ったように笑って自分を指さし「こりーん」と言った。

あ、名前！

「一条蓮です。」

「イチジョウレンデス？」

「蓮」

「レン」

通じたことがうれしくて顔がほころぶ。
こりーんと名乗った彼も小さく笑った。
仏頂面してると怖いけど、笑うと途端にかわいい感じになる。

どうやら彼はあたしの世話係らしい。

あたしがなんでここにいるのかはよくわからない。
でもここがどこだったとしてもこの人たちはあたしにビビらないでとにかく衣食住を提供してくれるみたいだ。
そうしたらとにかく言葉を覚えて彼らとコミュニケーションがとれるようにならなければ。
日本に帰るのはそれからだ。
やっぱり人は満腹になると冷静になるらしい。
さっきのイケメンに抱かれたときはどうなるかと思ったけど、人間案外大丈夫なもんだとおもう。

＊

その夜
やっぱりというべきか恐ろしくロリータなネグリジェを着せられてふかふかのベッドに寝かされた。
でもこんなにいいベッド庶民のあたしにはもったいなすぎて寝られない。
床だって毛足の長い絨毯が敷いてあってこれで十分寝られそうだと思ってそんな自分の貧乏性に笑ってしまう。
月明かりが妙に明るくてばさりと布団をのけるとベッドを降りて窓に近づく。
窓の外を見てあたしは驚愕した。
空には見たこともないくらいの大きな月。

ここは地球じゃない…。
バカみたいなそんな考えがよぎりあたしは頭を振った。
どうしよう。
ここはどこなの？
全然知らない場所。
不意に現実感がひたひたとこみあげてきて泣きそうになった。
馬鹿みたいに大きな月が涙でゆがむ。
きゅっと口を引き結び、ネグリジェの袖で涙をこする。

泣いても何も変わらない。
それどころか泣いたところであたしの気持ちをわかる人などいないのだ。
それを吐露する術さえないから。
だから泣く前に、自分のできることをやろう。
そして今は言葉を覚えること。
そうしないと生きてはいけないから。

あたしは布団の中におとなしく戻り目をつむった。
明日目が腫れませんように。
何も知らないこの人たちを心配させたくないから。

月明かりはあたしの知っているものとはくらべものにならないくらいに明るくて怖いくらいだった。

5．勉強、毎日の目標

次の日からあたしは一日のうちほとんどを費やして勉強し続けた。
そのうち七割近くはスピーキング。
残りはリーディングとライティング。
大学受験の時だってこんなにも勉強はしなかったぞっていうくらいに。
それはあたしの意志というよりも、コリーンのスパルタ教育のせいというほうがおおきいけれど、やることがあってそれに没頭していられるのはいい。
あまり多くのことを考えずに済むから。

きめの粗い紙と羽ペン。
どちらもこの世界ではかなり高価なものには違いないからなるべく小さな字で書きつけていく。
人の名前から物の名前、動詞。
必要にかられてるというところが大きいにしても、毎日目に見えてわかることが多くなっていくのは楽しいものだ。
目標があるのはいい。

ここにきてそろそろ一週間。
あたしが初めて会ったあのイケメンは「カイルザーク」という名前らしい。「エンティア」つまりこの国の王様らしい。
どうりでエラそうというかオーラが半端ないと思った。
一度だけ顔を合わせたけれど言葉を交わすでもなく少しコリーンやマリーナ（メイドさん）と話して去って行った。
なぜあたしがここにとどまることを許可してくれるのか不思議でならないけれど。

＊

最近のあたしのテキストはもっぱら幼児用の絵本。
城の図書館にはありとあらゆる本がそろっていてありがたいことこの上ない。

「こりーん。本。読む。行く。」

子供みたいで情けないけれど、致し方ない。
あたしはいつも通りコリーンの袖を引いてアピール。
コリーンは笑って了承してくれた。

さてさて今日の勉強はと。
数の本。
数の数え方がのっている。

これだって法則性さえ見えればそんなに難しくないはず。

1＝イラ
2＝ケ
3＝タナ
…
なるほど。

おっ、今度は図解で歳の聞き方の例文がのっている。

あなた＝てゅあ

歳＝きーる

「てゅあきーるかまとーた？」

コリーンにむかってそう聞いてみる。
コリーンは驚いたように一瞬目を見開き「ケナンキータ」といった。
ケナンキータということは…２７。
意外に若い。
落ち着いてるせいかもう少し上だと思ってた。

「テュアキールカマトゥータ？」

コリーンは子供に聞くように言った。
２４だから

「えーと…けなんふぉーん。」

コリーンはぷっと噴出して「イランフォーンナダ？」
１４でしょ？というニュアンスだと思うけど。いくらあたしでもそんな間違いはしない。

「ヤバ。けなんふぉーん。」

ちがう２４よ。
とゆっくり言い直してみると、コリーンは信じられないといった様子で目を見開いた。

どうやらほんとにあたしが１４，５だと思ってたらしい。
やっぱり日本人は若く見られるらしい。
でもこの場合全然うれしくないけど。

そして妙にふりふりした服とかがなぜなのか思い至り、ため息を着いた。

6．夜の中庭

異世界から来た具現者、名をレンといったが、彼女が私とそう歳が変わらないとコリーンから聞いたとき正直驚きを隠せなかった。
小柄で華奢な体つきや幼い顔立ちを見ると、せいぜい１４，５だと思っていたのに、２４とは。
まったく異世界とは恐ろしいものだと思う。
魔術か何か使っているのではないかと思うほどだ。

レンとやらはこの世界の言葉をまったく話せないが、必死で言葉を覚えてこの世界になじもうとしている。
必死で覚えた言葉を書きつけていて、驚くほどの速さで言葉を覚えていっているのだとコリーンが報告した。
きっとまじめでひたむきな性格なのだろう。
彼女はどんな生活を元板世界でしていたのだろうか。
２４ともなれば夫や子供がいたのやもしれぬ。
彼女の生活も人生も家族もすべて奪って、さらにその命まで犠牲にしようとしている。
なんという罪深いことだ。
罪悪感を抱くことすら勝手でしかない。
だがいつかそう遠くない未来その命を奪う人間に向き合えるほど、私は強くなかった。

＊

夜の中庭には今が盛りのバラの花からかぐわしい香りが満ちている。
この静謐とバラの香りが心地よい。

私は庭の隅にあるベンチに腰を下ろした。
ここは奥まっていてめったに誰も来ない。
ただ一人になりたいとき、眠れぬ時に来れる唯一の場所だった。
コリーンに見つかればまた口うるさく言われるだろう。
「皇帝ともあろうお方の御身に万一のことがございますればいかがされるおつもりですか！」と。
コリーンの眉をひそめた仏頂面を思い浮かべて私は苦笑した。
ふと自分の手の平を見やる。
この手に何十万の命と生活が懸かっている。
私の何を犠牲にしてでもこの国を戦火にさらすわけにはいかない。

古くからの歴史をもつこの国は小国ながらも隣国と不可侵条約を結び、温暖な気候と海に面した地の利を生かし、漁業と農業で栄えてきた。だが１０年ほどまえに、我が国の東部にあるワーシュレ山脈から貴重な鉱物が採掘されたとたんに隣国の目の色が変わった。
虎視眈々とこの地に攻め入る隙を狙い始めたのだ。
西のレガート帝国は強大な軍事国家。
昨年前帝のルマイレ３世に代わりルガーヌ２世が即位してから状況はますます緊迫するようになった。
新帝は苛烈な性格だと聞く。
軍の増強、隣国への植民地政策。
数年以内に我が国にも浸食の手を伸ばしてくることは間違いがない。
他の国と協力しようにも、レガート帝国の軍事力はあまりにも強大だった。
今我が国はかつてない危機に瀕している。
レガート帝国との折衝、国内軍備の強化を何を持ってでも進めなければ。

私は目をつむり組んだ手を瞼に押し当てた。

と、その時。

私は背後に人の気配を感じ、無意識に使い込んだ剣のつかに手をかけた。

気配が動いたその刹那。

一気に剣を引き抜き、背後の気配に向かって突きつける。

「っ！！」

そこにいたのはレンとかいう女だった。

あまりのことに声も出ないのか目をいっぱいに見開いてその場に腰を抜かしている。

私はバツが悪くなって、剣を鞘にしまう。

「私の後ろに立つな。誤って切り殺しかねん。」

「なに？」

女はまだ言葉を理解しないのだろう。

私の言葉に首をかしげる。その拍子に肩より少し長い黒髪がはらりと揺れる。

それは小さな小動物を彷彿とさせて私を妙にいらだたせた。

「去れ。」

女のほうを見もしないで言い捨てる。

「かいるざーく、なに？」

女は少し眉をひそめて私の言葉を聞き取ろうとする。

わけのわからぬいらだちに私は剣を抜き、女に突きつける。

それは自分でも理解できない暴力的な衝動だった。

「これ以上ここにとどまるなら殺す。」

私は声を絞り出した。

女は私の様子に何かを察したのか踵を返して走り去っていった。

この得体のしれぬ衝動がなんなのか私には測り兼ねた。

レンというあの女が独特の発音で発した私の名。

”カイルザーク”

ついぞ呼ばれたことのない自分の名に心が揺れたことに私は気づかないふりをした。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n5558z/

たった一つの願い

2011年12月24日04時47分発行